

# 残念召喚士と精霊の日常

箱の中の世界

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ウンディーネとサラマンダーとシルフの三精霊と住む主人公のお話。

※思い付きで書いたため、おかしい部分があると思います。

※タイトルを精霊と俺の日常から残念召喚士と精霊の日常に変更。

こちらの方が個人的にしっくりきたので

目次

## 精霊と俺の日常

朝、家の中に少女の声が木霊する。

「マスター！　起きてください！　朝ですよー！」

少女はそう言い寝ている俺を揺さぶる。

「……あと5分……スヤア……」

俺はそう言うともう一度眠りにつく。

「ますたあ？」（イライラ）

ん？声に怒りを感じるぞ？まさか……

「マスターのバカあ！」

少女がそう叫ぶと俺の顔に大量の水が……

「うぼあっ!?　溺れるだろうが！」

「だってマスターが起きないのが悪いじゃないですか！」

「つたく……少しは我慢を覚えろよ……ウンディーネ……」

そう言う俺の目の前にいる蒼い髪と瞳を持つ少女はにっこりと笑い

「それは無理です」

そうキツパリと言ったのであった。

◆◆◆◆◆

ウンディーネに起こされた俺は服を着替えるとテーブルに備え付けられている椅子に座った。

「マスター、今日の朝ご飯はミネラルウォーターとフルーツです！」

そう言いウンディーネは俺の前にコップに入ったミネラルウォーターとフルーツの盛られた皿を出した。

「……あ、あの、ウンディーネさん？　これだけなのかな？」

「そうですね？　何か問題でも？」

問題アリですよ……

これじゃあ1日頑張れねえよ……

あと目が怖いです……

「それじゃあマスター、私は洗濯が残っているのよ」

ウンディーネはそう言うのと衣服などを持って外に出ていった。

「ハア……なんでこんなことになったんだろう……」

◆◆◆◆◆

思い返すと初めてウンディーネとあったのは2年前……

俺が興味本意で精霊魔法を使ったのが原因だ。

実はその時呼び出した精霊はウンディーネの他に2体いる。紅いショートヘアに紅い瞳をもつサラマンダー、碧のポニーテールと瞳を持つシルフの2体だが、この2体はウンディーネとは違いしっかりと主従関係が来ている。

いや、ウンディーネも主従関係はあると思うのだが、あれはどう考えても俺が下でウンディーネが上……という感じだ。

そう言えばまだサラマンダーとシルフの姿を見ていない。まだ寝ているのだろうか。起こしに行つてやろうかな。だがその前に朝ご飯(?)を食べなければ……

◆◆◆◆◆

俺は朝ご飯(?)を食べ終わると精霊達が寝ている部屋に向かう。

部屋の前に来たが、声はしない。どうやらまだ寝ているらしい。

俺は扉を開ける。

「おーい、サラマンダー、シルフ。起きろ……よッ!」

結論から言おう。部屋の中にいた2体は寝てはいなかった。着替えていたのだ。だが、扉を開けるタイミングが悪かった。なんせ2体は今下着だけの姿だったのだから……

「おうー。マスターー! おはようー!」

俺に気付いたサラマンダーが挨拶をしてくる。挨拶をするのは良いことだがとりあえず服を着てください。お願いします。

「お……おう、おはようだなサラマンダー」

ふと俺はシルフの方を見る。シルフは涙を浮かべながら俺を見ている。

……目が合った。

あ……これは嫌な予感がする。

「うわああああん!!」

大声をあげて泣くシルフ。俺はシルフを泣き止ませようとするが、シルフは泣き止まない。

「あー、マスター。シルフ泣かせたらダメなんだぞ?」

「い……いや、俺が……」マスター! 何やってるんですか!?!」う

げっ……ウンディーネ……」

急に現れたウンディーネは俺の服の首根っこを掴むと俺を引きずって部屋を後にした。

俺はウンディーネに引きずられながらこんな会話をしていた。

「マスター……シルフを泣かせた罰として今日は1日家事を頼みますよ」

「え……家事はちよつと……」

「ちなみに強制なので拒否権はありません」

「え……」

この時のウンディーネの目はまるで養豚場を見下ろすような目だった……